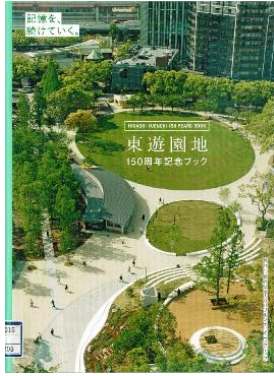


参考.. 『神戸市文化財調査報告書
『美囊野通信』第三号ほか
平成10年度
*天は年と同じ

東遊園地150周年記念ブック 記憶を、続けていく。（一般社団法人リバブルシティイニシアティブ）

居留外国人たちがスポーツや散歩ができる公園の設置を要望して開かれた東遊園地は、二〇二五年に一五〇周年を迎えた。本書はその記念として編まれた冊子である。東遊園地は、用途だけでなく、施設や区画も変えながら歩みを重ね、阪神・淡路大震災以降は鎮魂・祈りの場としても歴史を刻んでいる。市民有志による社会実験を経て、「みんなが育てる場所」として二〇二三年に全面リニューアルされた。

豊富な写真で今昔を振り返るだけでなく、生まれ変わった東遊園地に足を運びたくなる一冊。



運命まかせ 横尾忠則（新潮社）

今年九〇歳を迎える現代美術家の半生を綴る連載エッセイ集。老いによる運動機能の衰えや難聴・視力低下を「面白い！」と受け入れ、それをエネルギーにして創作を続ける。

若き日の出来事として、元町通りの喫茶店で催したグループ展がデザイナーの目に留まり、神戸新聞社に採用されるきっかけとなったことや、三宮駅前の神戸新聞会館内に勤めていた妻との馴れ初めなど、神戸で過ごしたエピソードも収録されている。

松本隆と風街さんぽ 辛島いづみ（文藝春秋）

昭和を代表する作詞家・松本隆のゆかりの場所をめぐる一冊。著者が松本とともに東京や神戸、伊香保、京都などを訪れ、思い出話や楽曲制作秘話を聞きとった。

海と港と山がある神戸に惹かれて移住し、現在は京都との二拠点生活を送る。元町や御影の馴染みの店や、トアロードのシンボルアーチ改修時に松本の詞が刻まれた経緯など、「神戸の友だち」との心温まるエピソードが語られる。

筒井康隆エッセイ集成2 記憶の断片 筒井康隆著 日下三蔵編（早川書房）

昭和期に発表されたエッセイの中で、単行本化されていないものを中心に収録した選集。「神戸の文化」の章には、神戸に引越しようと思い立った頃のことや、一九七二年に垂水区へ転居してから書かれたエッセイが収められている。

垂水の自宅の周辺をはじめ、トアロードや三宮高架商店街、行きつけの飲食店、神戸まつりなどについて縦横無尽に語る文章からは神戸に住む喜びがあふれ出ている。

コビトカバまるごとBOOK 神戸どうぶつ王国監修（辰巳出版）

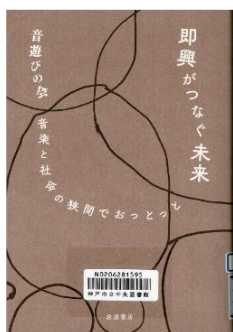
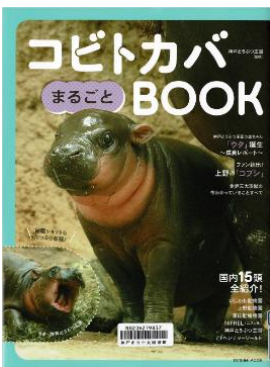
コビトカバはアフリカに生息する哺乳類で、国内の飼育例も少ない。普段は単独で生活するため、繁殖する際は発情後の数日のみ同居させる。神戸どうぶつ王国では繁殖の取り組みが成功し、待望の赤ちゃん「ウタ」が生まれた。ウタの誕生秘話と成長の様子がまとめられている。

白い汗の秘密や謎の耳毛、短い尻尾など、知れば知るほど面白いコビトカバの世界を味わえる。

即興がつなぐ未来 音楽と社会の狭間でおととと 音遊びの会（岩波書店）

二〇〇五年九月に神戸大学大学院の学生を中心に設立された「音遊びの会」は、知的な障害のある人や音楽家などから構成され、即興演奏を中心としたパフォーマンスを行うアーティスト大集団。本書は、音遊びの会に関わる人々が、それぞれの視点で語った二〇年の軌跡である。

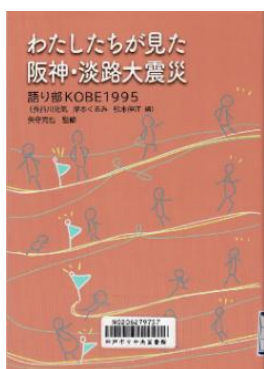
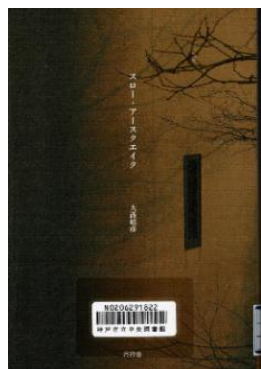
楽譜も打ち合わせもなく、その場で生まれる音楽と、互いの「ありのまま」を受け入れる姿勢は、自分自身や社会を見つめ直し、これからの社会のあり方を考えるきっかけを与えてくれる。



わたしたちが見た阪神・淡路大震災
語り部KOBEL1995 (神戸新聞総合出版
センター)

語り部KOBEL1995は、阪神・淡路大震災の経験を語り継いできた市民団体である。二〇〇五年に結成し、現在は八〇代から震災当日生まれの三〇代までの多彩なメンバーで活動を続けている。

本書は二部構成からなり、第一部は語り部メンバーの震災経験を手記の形でまとめている。第二部ではその経験を元に、震災後に生まれた若い世代が制作した防災教材や学校の授業での活用方法を紹介する。震災から三〇年以上が経ち、記憶の風化が進む今こそ読みたい本である。



スロー・アースクエイク 大西昭彦
(月待舎)

スロー・アースクエイクとは、直訳すると「緩やかな地震」となり、体感できないほど小さな揺れによって数日から数週間かけて断層がずれていく現象を指す。

本書は、阪神・淡路大震災から三〇年の間に、静かに変化した神戸の町のことや、震災を体験した人々が受け止めている「終わりの見えない揺れ」のような記憶の変化のことを、スロー・アースクエイクと重ね合わせている。

ジャーナリストで詩人でもある著者が、これまで新聞や雑誌に掲載してきた原稿をまとめ、新たに書き下ろしも加えた一冊。

その他の新刊!!

古墳時代の播磨 播磨学研究所編
(神戸新聞総合出版センター)
モダニズムと関西の前衛 都市・美術・近代美術館 山野英嗣(東信堂)
橋間石の百句 アポロとディオニソス 赤松勝(ふらんす堂)

神戸 その③⑥ あんな人こんな人

福澤 諭吉 ふくざわ・ゆきち 天保5年(1835) ~ 明治34年(1901)

旧一万円札の肖像として広く知られる福澤諭吉ですが、神戸とも様々な関わりがありました。福澤は豊前中津藩*1の下級武士の子として、大阪にあった藩の蔵屋敷で生まれました。安政5年(1858)、藩命により江戸へ赴き、そこで三田藩出身の蘭学者・川本幸民との知己を得ます。この出会いを通じて、三田藩最後の当主・九鬼隆義との交流が始まりました。廃藩置県後の進路に悩む九鬼に、福澤は商業への転身を勧めました。福澤を相談役とした九鬼は、白洲退蔵や小寺泰次郎ら旧藩士とともに神戸へ進出し、貿易会社「志摩三商会」を設立します。また、旧藩士らは将来性のある神戸の土地を取得し、地価上昇とともに大きな利益を得ました。神戸地方方法務局に保管されている明治初期の地図*2には、下山手通の志摩三商会の区画のすぐ近くに、福澤自身の名も記されています。福澤は九鬼へ手紙で助言を行うだけでなく、招かれて三田を訪問し、その足で有馬温泉にも向かいました。有馬温泉では「湯は至てぬるく、我輩には得意なり」と友人に書き送っています。

また、福澤は神戸の教育にも力を貸しました。兵庫県権令・森岡昌純から商業教育機関設立への協力を依頼されると快く応じ、慶應義塾から教師を派遣します。これにより明治11年(1878)、商法講習所(現・一橋大学)に次ぐ全国で2番目の商業教育機関・神戸商業講習所(現・兵庫県立神戸商業高等学校)が北長狭通4丁目に開校しました。

明治22年(1889)には家族を伴って上方見物に訪れ、神戸では湊川神社、布引の滝、生田神社、清盛塚、和田岬から須磨、舞子まで足を延ばしました。須磨寺で「青葉の笛」を見たことなど、その旅の様子は「道中日記」に記されています。



兵庫県立神戸商業学校
(神戸商業講習所の後身)
発祥地碑 JR元町駅北側

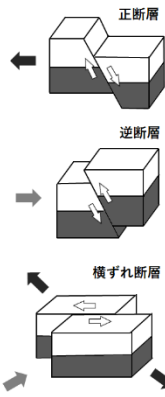
【参考】成田謙吉「福沢諭吉と神戸」(「神戸の歴史」5号, 1981), 「道中日記」『福沢諭吉全集』第19巻(岩波書店, 1962), 『歴程90年』(兵庫県立神戸商業高等学校, 1968)ほか
*1 現在の大分県 *2 松田裕之『港都神戸を造った男』(風詠社, 2017) p129に掲載

ランダム・ウォーク・

イン・コウベ⑬

丸山衝上断層（丸山断層）

六甲山地には大阪湾にかけて諏訪山断層や甲陽断層など多くの断層が存在しています。断層とは、地層や岩石の割れ目を境にその両側がずれたもので、主に三種類あります。断層面に対して新しい地層が古い地層の上にくる断層を正断層、その反対に古い地層が新しい地層の上にくる断層を逆断層と呼びます。また、断層面が水平方向にずれる断層は横ずれ断層と呼ばれます。正断層は左右に引っ張る力、逆断層は左右からの押す力、横ずれ断層は斜め横からの力が加わることで形成されます。



長田区にある「丸山衝上断層（丸山断層）」は、中生代白亜紀後期にできた基盤の布引花こう閃緑岩がそれよりも後にできた神戸層群の上に衝き上げている逆断層です。この断層は昭和十二年（一九三七）に国の天

然記念物に指定されました。

神戸層群とは主に神戸市西部や三田、淡路北部に広く分布している地層で、保存のよい植物化石を多く含むことで知られています。地域によって異なりますが、主に砂岩・礫岩・泥岩・凝灰岩などからできているため、風化に伴って劣化しやすいという特徴を持ちます。一九八五年頃まで、神戸層群の年代は、約一五〇〇万年前と考えられていましたが、その後の年代測定によって、もっとも昔の約三八〇〇万年前から約三一〇〇万年前であることがわかりました。丸山衝上断層は、昭和七年（一九三二）に京都帝国大学で当時六甲の地質を調査していた上治寅次郎によって発見され、昭和十年（一九三五）に同大学の中村新太郎により命名されました。『兵庫縣史蹟名勝天然紀念物調査報告第十四輯』（昭和十四年）では、丸山盆地の東にある数箇所の断層の露出を丸山衝上断層と呼び、門ノ脇断層、ロ一里山断層など場所ごとに便宜的な名称をつけて記録しています。

門ノ脇断層（現・神戸市長田区明泉寺町）には、断層面がわかる露出（露頭）があり、断層の説明板が立っています。残念ながら現在は、

崖崩れの危険から補強工事がされており、露頭全体がフェンスで覆われています。とはいえ、花こう閃緑岩と神戸層群の境界は確認できるため、逆断層の構造をはっきりと読み取ることができます。



現在の門ノ脇断層
※文字・点線は筆者加筆

丸山衝上断層が学術的に重要と評価された点は大きく二つあります。

一つ目は、衝上断層である点です。衝上断層とは、断層面の傾斜が四五度以下の緩い角度の逆断層のことを指します。丸山衝上断層の傾斜は二五から五〇度程度と報告されています。現在では各地に衝上断層が存在しますが、当時は日本で最初の衝上断層の発見として学会で報告され、関心を集めました。

二つ目は、六甲山の構造を示すと同時に、大阪湾の陥没が六甲山の隆起と相関することを示している点です。丸山衝上断層が発見されるまで、六甲山はまわりの山地が陥没した結果、残った高地であると解釈する地

塁説が有力でした。しかし、逆断層である丸山衝上断層の発見により、六甲山は長期間にわたり地殻に東西からの強い圧力が加わった結果、大阪湾の陥没に伴い、隆起してできた場所ではないかという説が提唱されました。現在は後者の説であることが明らかになりましたが、この断層が発見された当時は衝撃のあまり、六甲山がどのようにしてできたのかについて夜通し議論が行われたそうです。



「門ノ脇断層」『兵庫縣史蹟名勝天然紀念物調査報告第十四輯』より
右の看板には「逆断層」と書かれています

丸山衝上断層は、いまでも見に行くことのできる市の唯一の天然記念物として、また、六甲山の成り立ちを物語り確かな証拠として、静かに存在し続けています。

参考文献：『六甲山と其の附近の地學』『六甲の断層をさぐる』『新修神戸市史』歴史編Ⅰほか

世界をひろげる、ほんとの出会い。
神戸「森」の文化振興プロジェクト

リサイクル適性 (A)

この印刷物は、印刷用の紙へリサイクルできます。